

## 『プラクティカル ジーニアス英和』を送る ——高校用学習英和のこれまでとこれから



小西友七

昨年秋の『ジーニアス英和辞典』第2版(G和英<sup>2</sup>)に続き、今年は『プラクティカル ジーニアス英和辞典』(PG)を出版することになった。これは1998年(平成10年)秋に出した『アクティブ ジーニアス英和辞典』(AG)の後継となるものであるが、単なる改訂でもなく名称を変えただけでもない。周知のように、最近のコンピュータコーパスの開発により、英米、特に英国の学習辞典の躍進の第一波は1995年に始まり、それまでの学習辞典の性格を一変させた。そして今度は第二波ともいうべく、*OWD*<sup>2</sup> (2000), *NPEG* (2001), *OALD*<sup>6</sup> (2000) [今年中に7版が出るという], *LDOCE*<sup>4</sup> (2003), *Cobuild*<sup>4</sup> (2003), *CALD* (2003), *ECSD* (2003), 米国でも *LAAD* (2000), *MED* (2002) が相次いで出版され、また新風を巻き起こしつつある。一方、日本ではますます「使える」英語の緊急性が増大しつつある。

このような状況下において、東森勲君らを中心として進めてきた、刷新的な枠組と新しい工夫がもりこまれたPGの出版は、正にタイムリーと言うべきであると思う。

### ■高校中級辞典の誕生

1987年秋、十年以上を費して、われわれが出版した『ジーニアス英和辞典』(G)は、高校二年生を中心に、大学生、一般社会人をも射程に入れた上級の学習辞典であった。これが、予想を上回る好評をもって迎えられた。特に、その翌年、英国の国際辞書学の専門機関の目にとまり、その書

評の中で、‘a consistently high standard throughout’ と評されたことは英和辞典としては珍しいことで、われわれ関係者一同にとっては大いに面目を施すとともに、今後の内容のいっそうの充実に意欲を新たにされた次第であった。

これに勢いを得てというか、いち早く「ジーニアス=ファミリー」の第一子ともいうべき、中級の高校学習辞典『フレッシュ ジーニアス英和』(FG)を誕生させたのはその翌年の1988年秋であった。しかし、これはまだ『ジーニアス英和』に近く、つまり‘親寄り’で程度が高いということから、1991年秋に、さらに中級の高校生に必要な情報だけに的を絞って、改良を加えて第2版を送り出した。これは、前よりはかなり‘親離れ’した独自性を出したものであった。そして、中級の高校用英和辞典として数年愛用され続けた。

ところが、先にも触れたように、1995年英国で主としてコーパスを利用した *OALD*<sup>5</sup>, *LDOCE*<sup>3</sup>, *Cobuild*<sup>3</sup>, *CIDE*, *HEED* (*CEED* と改名) などの画期的な学習辞書の改訂版や新版が続々現われた。少し遅れて米国でも *Newbury House* (1996), *RHWDA* (1997), *AHESLD* (1997), *NTC's AELD* (1998) がそれに負けじと続き、これまで学習辞典のなかったオーストラリアにも *AUSLD* (1997) が出現した。

一方、日本の英語教育では、指導要領にも学習の目標として「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」とあるように、これまでの「読み書き」優先が逆転して、aural-oralに重点を置いた4技能の習得が重要ということになり、最近の国

際情勢から、ますますコミュニケーションの必要性が唱えられるようになった。

このような内外の情勢から、コミュニケーションに即応できるような学習辞典の出現が待望されるようになってきた。これにこたえるために1998年秋に出版したのが、『アクティブ ジーニアス英和』(AG)であった。この辞典では、まずコミュニケーションの必要に対処するために、実際の例文、特に「対話文」を多く載せることにした。しかし、それだけでなく、辞書本来の目的に則って意味・用法をよく理解できるように努めた。例えば watch を「(動くものを) 見る」とすれば、watch the picture は「絵を見る」ことにはならないことや、look at [×watch] the painting が容易に理解できる。このように内包的意味 (connotative meaning) を可能な限り示すようにした。また、ランキングを見直し、AB ランクは高校生の発信に必要な語彙に絞り、ここに重点的にスペースを配分してコミュニケーションに必要な情報を多く載せるようにした。などなど。かくして、コミュニケーション、特に OC (oral communication) を重視した中級の学習辞典としては完成度の高いものであったと自負している。

2002年秋には弟分の初級の『ヤング ジーニアス』(YG)の後継辞書として『ベーシック ジーニアス』(BG)という、より初級らしい魅力的な英和辞典を出した。こうして、「ジーニアス=ファミリー」は、BG, AG, G, G 大(英和)(2001)がそれぞれ初級、中級、上級、大人用に対応するようになり、それぞれの段階における役割を備えた英和辞典の系列が完成した次第である。

### ■これからの中級英和辞典の使命

私が小学校低学年だった頃だろうか。親が私のために新しい靴を買ってくれた。伸び盛りのこととて、少し大き目のものだったらしく、爪先に布を詰めてくれたが、それでも、歩くごとに違和感があり、馴れるまで苦労した思い出がある。それ

に似たようなことを、春先の入学シーズンになると書店の新刊辞典コーナーで目撃することがある。先日も、新入生と思われる子が手にしていた初級辞典を、若い母親らしき人が、それではすぐ使えなくなるからと取り上げ、さっさと別のものを買っていった。同じ買うなら、先のことを考えて、上級の辞典をあてがっておけば、という心理が働くからであろうか。

これには、学習辞典の出版社側にも問題があったのかもしれない。準備段階の初級のものとはともかくとして、中級のは、やや境界があいまいであったように感じられる。この中級の段階では、さらに上級への展開を期しつつ、基礎固めの重要な時期で、aural-oral を軸に基本的な英語力を徹底的に身につけておくべき段階である。つまり、英語をよく聞き取れ、それに反応して適切に話すことができること、これを主にして、次いでよく読み取れ、適切に書けることである。要するに、この段階は「使える英語」の基礎の部分の反復訓練に尽きると言ってよい。決してそれ以上の高望みは慎むべきである。

しかし、今のところ大学入試が依然として OC よりも読み書きのほうに比重を置き、少しずつ改善に向かっているとはいえ、多くの学習者はそれを意識せざるをえないのは残念である。それゆえ、中級学習辞典も現段階ではまだ入試対策の要求にも応じなければならない面もある。が、中長期的には、その先を見越して、高校の英語教育の方針に連動し、OC 重点の方向に転換すべきであろう。理想としては、初級、中級、上級の各レベルの記述の重複を必要なかぎり避けて、独立性を確立し、各段階に沿った情報提供を目標とすべきである。中級辞典では、繰り返すが、具体的には working vocabulary としての AB ランクの語彙の徹底的理解と運用能力に資する情報提供に集中することはもちろんだが、CDなどを付して豊富な訓練の場を与えることも求められるであろう。

(こにし ともしち・神戸市外国語大学名誉教授)